

活動名 夏休み子ども保養キャンプ「ひろしま7日間冒険の旅」	団体名 広島県シェアリングネイチャー協会 地域 広島県廿日市市 代表者 理事長 住吉 和子 支援金額 25万円	広島県シェアリングネイチャー協会 広島県廿日市市 理事長 住吉 和子 25万円						
活動概要 <p>3. 11の被災地の子どもたちが、子どもだけで広島へ旅にでかけ、のんびりたっぷりと広島 の自然や人々とふれあうプログラム。廃校となった木造校舎で大家族として共同生活をし、主 体性を育む。また豊かな自然・農村風景や人々に囲まれた環境のなかで、自然体験を通してセ ンスオブワンダーや生きる力を養う。</p> <p>◆実施時期</p> <p>7/20（月・祝）～26（日）</p> <p>ねらい</p> <p>7/20（月・祝）「一緒に過ごす被災地児童と広島県児童が仲良くなる日」 7/21（火）「地域を探検し、自然や人とふれあおう」 7/22（水）「地域の小学校で交流しよう・自然体験で山の自然を感じよう」 7/23（木）「地域の小学校で交流しよう・自然体験で川の自然を感じよう」 7/24（金）「原爆や震災後に復興に力を尽くした人々の活動を学び、平和のために 自分に出来ることを考えよう・三次市児童といっしょに」 7/25（土）「一緒に過ごした日々をふりかえり、思い出作りをしよう」 7/26（日）「出会いとわかれを体験しよう」</p> <p>◆参加人数</p> <table border="0"> <tr> <td>①被災地参加児童</td> <td>49名</td> </tr> <tr> <td>②広島県内児童（参加児童・川西小学校児童）</td> <td>155名</td> </tr> <tr> <td>③スタッフ・ボランティア</td> <td>111名</td> </tr> </table> <p style="text-align: right;">参加総人員:315名</p>			①被災地参加児童	49名	②広島県内児童（参加児童・川西小学校児童）	155名	③スタッフ・ボランティア	111名
①被災地参加児童	49名							
②広島県内児童（参加児童・川西小学校児童）	155名							
③スタッフ・ボランティア	111名							



川西小学校交流会



歓迎のアーチでお出迎え



平和学習



地域探検(竹廣さん宅)

◆実施に伴う効果

この活動によって広島県内の児童と東日本被災地児童が交流することが出来、広島の子どもたちが被災地の今を学ぶことが出来た。「放射能汚染されていないか知りたいから、今日使った牛乳とか野菜の産地を教えて」「福島産の野菜でも、ちゃんと残留検査しているんだから、食べられるのに、風評被害を広げるニュースばかりで困る。」「友だちが体育館の屋根が落ちてきた下敷きになった。自分も目の前にいたが下敷きにならず助かった。友だちも救出されてよかった。」「4月から行く予定だった小学校が津波にあって、流れてしまったのでショックだった」「まだ小さかったから覚えていない」など、被災地児童の会話に広島の子どもたちは接し、3・11を身近に感じる事が出来た。

この事業を通して、当団体は多くの団体と交流することが出来た。「被災地の為なら」と協力いただける団体がたくさんあり、人の温かさを感じる事ができた。そして、地域の人々や多くの団体から「なにか被災地のために出来ることをしたいと思っていた」という声と共に、たくさんの協力を得ることができた。事業終了後には「また協力させてください」と感謝していただき、地元の小学校からも、「また被災地との交流活動を行ってください」との声をいただいている。参加者から「来年も」との声も上がっている。

◆苦勞した点

- ・予算において、参加費収入を抑えるために寄付金や寄付物品・寄付食材集めに苦勞した。
- ・長期泊キャンプによる保養や充実した体験教育に狙いをおいた事業であったが、体験教育やキャンプ生活支援が楽しく効果的に行える人材ネットワークがまだまだ出来ていない。予算も少ない中で、少人数での対応となったため、各スタッフにとって体力的な負担が大きかった。
- ・福島、被災地周辺との関わりがこれまで薄かったため、被災地からの参加者募集に苦勞した。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・来年以降継続していくための資金作りや人材集めが課題となった。
- ・資金づくりにおいては、寄付集めと助成団体の情報集めを今後行っていく。
- ・人材集めにおいては、体験活動関連団体の連携を今後より強めていくことで継続を図りたい。
- ・被災地と広島の交流による体験活動を今後も継続していける方向を目指す。

◆活動を終えての感想・意見等

東日本大震災の被災地では今もなお、復興活動が続いており、また放射能汚染も解決の目途がたっていない。しかし距離的にも遠く、報道も少なくなったため、広島に住んでいる私たちは3・11を忘れかけている。一方で今回の事業を通して「被災地の為に自分に出来ることを何かしたい」という思いでいる人々が今もなお沢山いらっしゃることを知った。被災地の参加者と共に人々の心にふれることが出来、感動した。70年前の8・6当時も、同じように東北から遠い「ヒロシマ」の出来事は捉えられていたのではないかと。年月が経つ中で、ヒロシマの記憶は失われかけている。ところが今もなお、「ヒロシマ」のために出来ることをしたい・反核運動を支援したいという思いは全国から広島・長崎につながっている。

今回の活動を通し、平和への想いで「つながる」ことが、明日への希望となり生きる力になるかを感じることが出来た。そして、ヒロシマの復興を助けてくださった人々へのご恩を忘れず、今後も広島が出来ることを続けたいと感じた。広島の豊かな自然体験と平和学習のできる資源を全国の子どもたち、特に被災地の子どもたちにつなげる活動を継続していける方向を探りたい。